

京都大学	博士(文学)	氏名	鈴木 達 明
論文題目	戦国時代道家の思想と表現形式について —— 黄老思想を中心として		
(論文内容の要旨) 第一章『『莊子』における言語問題と言説への意識について』 言語の意味表象能力に対して否定的な考え方をもち、また言語化不可能という性質を、「道」が絶対的な存在であるための重要な条件として設定していた『莊子』にとって、「道」について語ることは、自らの言語思想と矛盾をきたし、「道」の絶対性を失わせる可能性を有するという点で、危険な行為であった。『莊子』のテキストはその危険性への意識を背景として持っているために、その言語思想と表現形式の間には緊密な関連性があると考えられる。『莊子』の言語思想について検討すると、言語の意味表象能力への不信が明確に見られるところでも、その不信の度合いによって、大きく二つに分けることができる。一つは、『莊子』の最古層に属し、言語の意味表象能力に徹底した不信を持つ齊物論篇。もう一つは、時代的にはそれに遅れる、「道」の言語化は排除するが、他の万物については、言語に一定の機能を認める部分である。『莊子』の中では後者の部分が量的には多くを占めている。この二つの部分について、その言説を見てみると、それぞれに独特の表現形式を持つことがわかる。まず前者には三つの特徴的な形式が見られた。反復疑問文によって疑問を提起するが、結局答えを出さない「判断放棄の表現」、「言」への不信を表明した後で、「嘗試論之」などの言辞を置いて、その前提を一時保留した上で語る「不信保留の表現」、最後に否定の連続に代表される、同型句・類型句の反復による列叙表現（「言説の過剰」）である。 一方後者にはこれらの表現形式は見られないが、そのかわりに、技巧的な寓言や、言語以外の伝達方法を用いるなど、寓言篇の文体論や天下篇の莊子批評にも見られるような、語り得ない「道」を語る言説を作り出そうとする試みを見ることができる。このような『莊子』における二種類の言説は、コミュニケーションへの強い意志を持ちながら、「語り得ぬものを語るためのことば」を語ろうとする苦心が原動力となって作り出され、また変化してきたものであると考えられる。 第二章『『莊子』の定型押韻句と黄老思想』 先秦の文献には、散文の一部に押韻句を含むという例がしばしば見られるが、『莊子』もまた例外ではない。本章では、『莊子』の押韻部分、特に一定の長さにわたって整った句型が連続する押韻句（「定型押韻句」と呼称する）について、その思想的背景と修辭的機能について考える。 『莊子』の定型押韻句の出現状況・内容について整理すると、定型押韻句の多くが、問答型の寓話における回答者の言葉の中において特に重要な部分に用いられ、「道」或いは「道」を体現する者についての説明や描写を行うという傾向があることが分かる。			

また、定型押韻句が出現する部分の背景となっている思想にも一定の共通性がある。それは、「道」の思想を根本に置きつつも、天道思想や養生思想を重視し、儒家をはじめとする他の諸子の思想と融合して、現実の政治への志向を強めた複合的な道家思想であり、広義の黄老思想と呼べるものである。このような黄老思想と定型押韻句との結びつきが、どの程度の広がりを持っているのかを、『管子』を対象として検証すると、様々な思想的背景を持ったテキストの中で、定型押韻句と黄老思想とが結び付いていることが確認できる。以上を踏まえると、『莊子』における定型押韻句は、「道」を語るための表現形式として、一種の権威性を持った表現形式として創作され、用いられていたと考えられる。『管子』心術上篇の経一解形式を始めとして、他の黄老思想文献にも、その定型押韻句の機能を利用した例は見られるものの、それらと比較しても『莊子』の多彩な表現は高い独自性を持つと言える。この『莊子』の独自性は、第一章と同様、本来語り得ない「道」をいかに語るかという問題に長くかかわってきたことに由来するものであると考えられる。

第三章「楚地出土簡帛資料に現れる定型押韻句について」 第二章に続いて、本章では、楚地出土簡帛資料、特に郭店楚墓竹簡と上海博物館蔵戦国楚竹書を中心として、定型押韻句の出現状況を調査した。その結果を踏まえ、伝世文献における状況とも比較しながら、定型押韻句と同時に現れる黄老思想について考察する。戦国時代の楚の地方から新たに発見された資料（楚地出土資料）の中で、一篇全体にわたって定型押韻句が見られるものとしては、郭店楚簡では『老子』『語叢四』が、上博楚簡では『彭祖』『三徳』『用曰』がある。これらのテキストは、「道」を主題としたものではないが、もともと特殊な形式をとる『用曰』は除いて、いずれも道家的な思想の影響が確認できる。その「道家的」とされる部分に現れるのは、天道思想、政治への積極性、養生説など、第二章で見たような「黄老思想」の特徴である思想的要素に他ならない。更に漢代初期の楚地出土資料である馬王堆帛書及び張家山漢簡の思想文献についても同様の調査を行うと、前者では『老子』の他に、「老子乙本卷前古逸書」（いわゆる『黄帝書』）に、後者では、『蓋廬』に、よく整った定型押韻句が大量に見られることが分かる。これら漢代の楚簡は戦国楚簡以上に明確に黄老思想との影響関係を持つものと言える。以上の結果から、戦国時代の黄老思想について考えてみると、それは漢初の黄老思想における学派集団的な形態とは異なり、様々な思想家たちによって自由に利用される、思潮的なものとして存在していたと考えるべきである。なぜならば、戦国楚簡で黄老思想的な要素が見られるテキストは、いずれも第一義的には道家文献とは考えられないものであって、黄老思想を、いわば思想的な工具として用いていると考えられるからである。最後に、楚地出土資料の中で、一部に定型押韻句を含むものについて取り上げた。全てが黄老思想と関係があるわけではないけれども、その中でも『太一生水』『緇衣』『民之父母』『互先』などについては、間接的ながら黄老思想との関係性が指摘できる。

第四章「表現形式から見た先秦兵書の構造について」 兵書は、思想文献と技術文献の中間的な性格を持ち、黄老思想や定型押韻句の広がりを検討する場合には非常に重要な資料となる。ただ、一部の出土資料による裏付けを得られたものを除き、「武経七書」に代表される兵書の多くは、テキストの信頼性が低く、内容も統一性に欠ける部分がある。そこで、本章では、叙述形式と類似句の出現状況の考察を通して、各兵書の内的区分と兵書を横断する類似性について考える。叙述形式については、『六韜』『蓋廬』『曹沫之陳』は問答体、『孫子』は語録体、「守法守令等十三篇」『司馬法』『尉繚子』は論文体と、『呉子』を除いて基本的にはそれぞれが一つの形式を取っている。また、『呉子』『尉繚子』『六韜』『曹沫之陳』などに共通する特徴として、冒頭的一篇に説話体や問答体など、他と異なる叙述形式が見られるケースが多い。この特徴は出土資料中の兵書にも見られることから、漢代以降の編集に全て原因を帰すことは難しい。更に細かい叙述形式の差違に基づき、『呉子』『司馬法』『尉繚子』『六韜』の内的区分を指摘する。この区分の中で、特殊な叙述形式を取るものは、実戦的対処法あるいは軍制・軍令の記述など、内容としても特定の傾向を持つと言える。加えて、思想文献中の兵家言の叙述形式について検討すると、全てではないけれども、問答体への偏りが見て取れる。後半では類似句の出現状況について検討する。各兵書内部での重複部分は、ほぼ上記の区分けの内側に収まるもので、これは叙述形式での区分の傍証となるであろう。また、兵書間に（或いは他の思想文献も含めて）共通して見られる類似句を抽出すると、そこから『孫子』の先行性、『尉繚子』と「守法守令等十三篇」の近似性などが明確化される。『六韜』については、以前から指摘されていた『逸周書』との類似性の実態がより細かく分かる他、龍韜と『尉繚子』との繋がりも確認できる。また、従来の研究では軽視されていた『管子』九守篇・『鬼谷子』符言篇との類似句であるが、敦煌写本も含めて考えるならば、『六韜』もまた、その二書に匹敵する量を持つものであった。これら多くの箇所が登場する類似句の性質を見ると、格言や兵家言といった兵書としては自然な内容の他に、黄老思想的な内容を持つものも見える。これは、黄老思想と定型押韻句の関係性が、一端ではあれ、兵書でも窺えることを示唆している。末尾に「先秦兵書に共通する形式的特徴について」を付す。

第五章「先秦兵書における道家思想の利用と定型押韻句について」 兵書における軍事論には、しばしば道家思想を利用したものが見られる。そのような各兵書における道家思想の利用状況を、陰陽五行思想に基づいた用兵法である「兵陰陽学説」、無為・自然など『老子』に見られる概念を中心とする「老学的兵法」、天道思想や五行・陰陽を抽象的な議論の中で用いる「黄学的兵法」の三つの視点から抽出する。量的には相当な差違があるものの、ほとんどの兵書には、何らかの形で、道家思想の影響が見られる。その結果を、第四章での兵書の内的区分と組み合わせて考えることで、それぞれの兵書における道家思想の利用の状況を知ることが出来る。一方、兵書の中には、このような黄老思想が基本とする天人相関説に批判的な記述が存在する。特に『尉繚

子』と『六韜』の一部には、厳しい批判が見られる。『六韜』の場合、黄老思想に基づく兵法との矛盾が問題になるが、兵陰陽思想をいかに考えるかという問題と合わせて、その矛盾の解決を試みる。以上の先秦兵書における道家思想の利用状況を踏まえて、後半では定型押韻句の分布との対応を検証する。先秦兵書の多くは、ある程度の量の定型押韻句を含んでいる。しかしながら、『六韜』と『蓋廬』を除き、他の兵書では、定型押韻句の出現箇所と、黄老思想の影響が見られる部分との関係性はほとんど窺えない。『六韜』では文韜・武韜に偏って定型押韻句が現れる。篇や「韜」の単位で見た場合、それらの部分は、また黄老思想の影響を最も強く受けているところでもあった。このように、これら『六韜』の一部と『蓋廬』については、これまで見てきた黄老思想と定型押韻句の対応関係が、ある程度観察できる。末尾に「先秦兵書の定型押韻句」を付す。

(論文審査の結果の要旨)

中国先秦期の重要な学派のひとつである道家については、すでに長くゆたかな研究の歴史がある。さらに、1970年代以来、中国大陆で『老子』をはじめとする戦国時代から漢代の諸学派の古写本が陸続と出土しつつあることにより、中国古代の思想と文字・言語に関する研究は、今日きわだった活況を呈している。ただ、これら新出土資料を用いた研究の成果は、どちらかと言えば思想・歴史・言語などの分野にかたより、文学研究への応用はなお発展の過程にあると言わねばならない。本論文は、新出土資料まで視野に入れて、広く道家系文献一般にみられる言語観の類型、修辞法の類型を探求し、文学表現と思想の架橋をめざしたものである。

特に重点を置いて論じられるのは、非押韻の散文の叙述のあいだにまとまって出現し、論者が「定型押韻句」(一定の長さにならって整った句型が連続する押韻句)と呼ぶ文体のもつ機能である。「定型押韻句」自体は、はやく12世紀から注意を引いてきたが、それがなぜ存在するのか深く考察した例はなく、暗誦や口伝の便のための押韻など漠然とした説明が加えられるのみであった。論者は、『莊子』の各篇を詳細に検討し、「定型押韻句」の分布状況に明らかな偏りがあること、その出現する部分には、養生思想、天文現象をモデルとした恒常的で規則的な「天道」への依拠を説く天道思想、儒家との融和的な姿勢、現実の政治に対する積極的な姿勢といった傾向——広義の「黄老学派」的思想——が認められると指摘した。言い換えれば、「定型押韻句」は、『莊子』本来の思想を代表する部分にほとんど出現せず、後世に「黄老学派」的な要素をとりこんだ部分に集中して見いだされるというのである。「定型押韻句」の分布と『莊子』内部の思想的傾向の差異を結びつけた研究は過去に存在せず、今後の先秦文献研究にとっても示唆するところが大きい。

論者は、この指摘の妥当性を検証するために、ふたつの資料群を利用する。第一に、郭店楚墓竹簡・上海博物館蔵楚竹書という近年出土した文献である。これらの資料を選んだのは、「黄老学派」と楚との関係が従来から指摘されているためであり、「定型押韻句」出現状況を詳細に分析した結果、『莊子』に見いだされた修辞と思想の相関性はこれらの資料においても否定できないこと、思想と技術にまたがった文献においても認められることが論じられる。出土文献には原テキストの保存状況が良好とは言えない資料も数多く含まれ、解読とそれに対する修正がなお継続中であるため、完全な原文の決定には多大の困難がともなう。「定型押韻句」の識別もたやすくはない。論者は、雑誌やWeb上で陸続と発表されている最新の研究まで網羅し、その成果を十分に吟味した上で押韻の認定をおこなおうと努力している。

ついで取り上げられる第二の資料群は、上で注意された思想と技術とをつなぐ環として論者が注目する兵書——先秦に成立した可能性が高いと認めた『孫子』『呉子』『司馬法』『尉繚子』『六韜』および出土資料中の兵書——である。個々の資料の一篇一篇について、その文体、類似表現、「定型押韻句」の分布を調査した結果、すべての兵書

に道家的要素が含まれていること、思想とあわせて修辭的特徴も吸収した可能性があることが結論づけられる。なかでも「黄老学派」と「定型押韻句」の相関性を示す代表的な例とされているのが、『六韜』と張家山漢墓出土竹簡本『蓋廬』である。以上の結論を実証するべく本論文全体の最後に添えられた「先秦兵書の定型押韻句」は、論者の認定した全ての「定型押韻句」を列挙し、全押韻個所を抜き出して解説した資料編となっている。

本論文の説くところは、長期にわたる忍耐づよい基礎調査や原典精読から導かれたものである。修辭技法の用例や音韻史の資料とだけみなされがちであった押韻を、学派の問題を論じるための突破口とした着眼は、きわめて優れたものである。一部、期待どおりの十分な結果が得られない場合には、そのむねを注記して理由を求めるべく努めており、強引に自説の妥当性を主張することはない。

やや不足を感じさせるのは、研究対象が『莊子』、出土資料、兵書に集中し、論文題目の「戦国時代道家の思想」の全体を必ずしも尽くしていないこと、議論が「定型押韻句」に偏し、あたかもそれだけで道家や「黄老学派」の表現技法が尽くされるかのように錯覚させる点であろう。また、論者自身が上古中国語の音韻体系をどう考えるかについての考察も十分に展開されてはいない。けれども、対象の複雑さを念頭に置くなれば、こうした点の解明にはさらに長期の努力を必要とすることが明らかである。論者は問題点を自ら十分に認識して研究を続けつつあり、今後の新しい成果によって補うことが充分可能だと思われる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2010年2月19日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。